

シリーズ ひと

「赤ちゃんに優しい看護を」が
わたしのテーマでした。

池田 陽子^{いけだ ようこ}さん

新白岡在住。看護師。
平成17年4月から平成19年4月まで青年海外協力隊派遣事業でベトナムの医療活動を行った。



ベトナムでの活動の様子

平成15年のある日、池田さんは「(当時の)小泉首相がイラクへ保育器贈呈!」という新聞記事を目にして、以前にラオスから研修に来ていた看護師の言葉を思い出した。ラオスでは保育器の使い方がわからず、赤ちゃんが死んでしまうことがよくある。」

池田さんは「イラクでは保育器の使い方がわかるのかな?」と疑問に思ったことがきっかけで、自分にも発展途上国でなにかできないだろうかというインターネットでボランティアを検索した。そして、思い立ってから約1年半後、5年間勤めた川口市の病院を離れ、ベトナム中部クアンチ省立病院新生児室で医療活動を行うこととなった。

やその家族が廊下にもあふれ、床には生活ごみや排泄物がそのままにされ、そこらじゅうにアリがはい、壁はカビだらけ!

ところが意外にも最新の医療機器がそろっている。ベトナムは歴史的な背景もあり各国のODA(政府開発援助)の援助をほかの発展途上国より受けやすいためである。

しかし病院にエレベーターがないため運ぶことすらできず、レントゲンなどの大型の医療機器が宝の持ち腐れとなっている。

また、大型の機器でなくても外国語で書かれた説明書が読めないため使われないものや、使い方が間違っているものが多く、保育器は閉めておかなければいけない扉を全開にしていることが多い。

そのようなことから医療事故も頻繁に起こるが、物や人のせいにして終わりにしてしまい、問題が起きたとき考ええるシステムがない。

指導しなければならぬことが山ほどあったが、最初は挫折の連続であった。最初の2か月ぐらいはわたしの言うことを聞いてもらえませんでした。外国から来た看護師が医者に見せるのはプライドが許さなかつたのでしよう。」と苦勞話を話してくれた。しかし、池田さんの意見が正しかったことがいろいろな形で実証されてくると、みんなからの信頼が得られるようになってきたという。そして、努力のかいあって45%あ

ったクアンチ省病院小児科病棟においての未熟児の死亡率が、池田さんが赴任して1年半後には18%に激減した。そのことが「赤ちゃんに優しい看護を」をテーマに掲げがんばってきた池田さんにとってなにより嬉しいことだと目を輝かせる。

ベトナムでの2年間、途中何度も日本に帰りたいと思ったが、病院の仲間が新生児看護を好きになってくれたこと、元気になった赤ちゃんを退院後に見せにきてくれたこと、きれいになった小児科の新生児室を自慢げに話す仲間のことなどを思い出すと、投げ出さずがんばってよかった!と思うという。

そんな池田さんは、今後について「この経験を生かして国際協力にかかわっていききたいです。現地ではベトナム語で生活していましたが、やはり英語が必要だと実感しました。まずはアメリカに渡って語学を勉強したいと思います。」と意欲を見せてくれた。



バイクは家族の足。
全員乗ってもだいじょうぶ!